

## 5. 座右の銘

### 石の上にも三年、そうすれば何でもできるようになる

吉田氏の座右の銘は、「石の上にも三年」である。日数に表すと、1,095日である。これだけの時間があれば、タオルづくりなら何でもできようになる、と言う。「3年経ったら勝手にできる。機械も直るぞ。3年ずっと考えてたら、たいていの機械は直る。」

問題なのは、後継者がいないことである。シャトル織機を十二分に使いこなせるようになるには、相当な忍耐力と情熱がないとできない。吉田氏は、「自分一代で、もうしょうがないわ」とあきらめモードで言うが、他の織機では真似できない風合いのあるタオルを製織するにはシャトル織機を自由自在に操れる技術者が不可欠である。シャトル織機を使いこなせると、革新織機も動かせるため、技術に応用が利く。しかし、その逆はない。

後継者問題は今治タオル全体に言えることだが、吉田氏の知識と技術を継承し、ミナトタオルを存続させることは、のちのちのタオルづくりにとっても、日本のモノづくりにとってもたいへんな価値を生む。わかってはいても、実際に吉田氏のような技術者になるには、「石の上にも三年」以上の、経験と熱意と根性がないと難しい。一朝一夕にしてモノづくりはできないのである。

## 6. 若い世代に向けてのメッセージ

### 誰かタオル、つくらんかなあ・・・


若い世代へのメッセージ、というよりは切実な願いを込めた言葉が「誰かタオル、つくらんかなあ」である。なるほど、若者にメッセージを送るにも、メッセージを受けとる若者がいなければ意味が

ない。後継者の問題は、ミナトタオルのように製織工程を担うタオルメーカーに限った話ではなく、染晒などの加工業においても当てはまる。

今治タオルの産地ブランド化で少しは若者が戻りつつあるが、ミナトタオルのような小さなタオル工場の後継者を探すのは至難の業である。仮に後継者が現れたとしても、1つの条件と1つのハードルをクリアする必要がある。

条件とは、「タオルが好き」「モノづくりが好き」ということである。「好きやないとできんからね。モノをこしらえるのが好きな人とか。絵を描くのが好きな人は絵描きになるんやから、そういうふうにタオルをこしらえるのが好きじゃ、という人がおったらええんやけどね。」

ハードルとは、すごく儲かる商売ではないということである。消耗品であるタオルは、サイズにもよるが一枚の単価は安い。ましてや、シャトル織機で製織されたタオルと革新織機で製織されたタオルは風合いにこそ違いはあるが、そこにオーガニックという付加価値を付けないかぎり、革新織機で製織されたタオルよりも高く販売できないのが実情である。原材料、人件費、運搬費、減価償却費、税金などの諸費用を差し引いて、十分な利益を出すことは容易ではない。



いずれにしても、一人前の技術者になるには相当の時間と手間がかかる。昔は時間をかけて一端の職人になれたし、時間をかけてモノづくりに専念できた。「昔、職人さんは何日かかってもモノをこしらえよったわね。その代わり、職人の文化ができていた。今あるのは携帯電話の文化くらいぞ。昔は時間がかかっても給料払ってもらえてたし、今はそのような企業も減ってきたしね。だから、世知辛いんよ。」吉田氏はつづけて言う。「2014年にノーベル物理学賞を受賞した中村修二 さんは、徳島のあの企業において、地道に研究だけして給料くれよったからできたんよ。あれ、そうやなかったら生活できんからね。」

経済のグローバル化がますます加速するなかで、時間とコストのかかる基盤研究を重視する企業は少なくなり、短期的な視野から結果だけを優先する傾向にあるのは事実である。こうしたことも、日本のモノづくりに影響を与えており、吉田氏が危惧するように、日本のモノづくり文化が消えてなくなるのだろうか。その答えは、日本の将来を託された若い世代の選択に委ねられている。

最後に、「大切なのは、やはり人、そしてお金やね」と吉田氏。「お金がないとなんもできんぞ。『明日不渡りが出るぞ』といった危機は何回もあったもん。」経営者として技術者として、いくつもの顔を持ちながらタオルをつくりつづける吉田氏は、真にタオルが好きで、モノづくりが好きだからこそ、シャトル織機のみでタオルを製織する日本でも天下無双の存在である。

## 7. お気に入りの本

### 束の間の読書は推理小説

吉田氏は推理小説が好きである。最近の鼻貞は、宮部みゆき  と西村京太郎  の二人。宮部みゆきは、OL 生活を経て小説家になり、デビュー後は 1989 年に『魔術はささやく』で日本推理サスペンス大賞、1992 年に『龍は眠る』で日本推理作家協会賞、1993 年に『火車』で山本周五郎賞を受賞するなど、数多くの賞を獲得している。推理小説ではその後も『理由』で直木三十五賞、『模倣犯』で毎日出版文化賞特別賞、『名もなき毒』で吉川英治文学賞を受賞した。

西村京太郎は、1963 年に『歪んだ朝』でオール讀物推理小説新人賞を獲得し、その後も 1964 年に『宇宙艇 307』で SF コンテスト努力賞、1965 年に『天使の傷痕』で江戸川乱歩賞、1981 年に『終着駅殺人事件』で日本推理作家協会賞（長編部門）など

を受賞した。『十津川警部』に代表されるトラベルミステリーはテレビドラマでシリーズ化され、テレビで西村京太郎作品を見ない日はないほど、日本の推理小説家としてその名を轟かせている。



宮部みゆき『火車』新潮社、1998年。  
(今治市立図書館所蔵)



西村京太郎『十津川警部 海の見える駅』  
小学館、2018年（今治市立図書館所蔵）。

考えることが好きな吉田氏は、手の混んだストーリー構成で、犯人探しをするのがストレス発散になっている。ほぼ毎日工場にいてタオルをつくっている吉田氏は、寝る前のほんの束の間の休息時間に本を読む。最近はめっぽう目が弱くなり、すぐに就寝するそうであるが、今まで相当の数の推理小説を読んだ。

西村京太郎では、とくに『十津川警部シリーズ』を好んで読んだが、結末がほぼ一緒なので、推理するほどもなく犯人がわかってしまう。ちょっとずつ飽きてきたのが本音であるが、束の間の休息を読書で楽しんでいる。(完)

## 編集後記

ミナトタオルの代表・吉田さんは、職人であると同時に、当然ながら経営者でもあります。利益を上げ、数字の帳尻を合わせるのも吉田さんの大切な仕事です。今回のインタビューは、ちょうど確定申告の大変な事務処理を終えたあとの、ちょっとした休息日を利用して予定させていただきました。

吉田さんの事務処理部屋は、工場に隣接する小さな事務所です。事務所に入ると、まず視界に飛び込むのは伏見稲荷大社の赤提灯と狐様です。1983年の創業当時、商売繁盛を祈願して従業員の方が持ってきたそうです。それ以来、ずっとお世話しながら大切に祀ってあります。この狐様、吉田さんをいつも側から見守っている感じがします。それは、吉田さんが「丈夫ナカラダ、慾ハナク、ワラッテキル」からです。吉田さんとお話をしていると、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」のフレーズが頭に浮かびました。最初のフレーズはあまりに有名ですが、そのあとに「丈夫ナカラダヲモチ 慾ハナク 決シテ瞋ラズ イツモシツカニワラッテキル」がつづきます。このフレーズこそ、吉田さんそのものです。中学を卒業後、ただただタオル工場にいるのが好きで、タオルをつくるのが好きで、ミナトタオルを創業しました。そして、いまでもこうして元気にタオルに囲まれて笑っています。



本文中にインタビュー時の文言をそのまま引用させていただいたのは、言葉の節々に吉田さんの人となりが見え出ていたからです。それを少しでも伝えたいとおもい、所々に吉田さんの白話を挿入しました。(辻)

## 次回の「タオルびと」

「タオルびと」の20人目は、初代タオルマイスターに任命された、今治でも有名なタオル製織技術者の谷口史郎氏である。(株)オリムで70歳の定年

まで技術者として第一線におり、退職後は四国タオル技能士研究会をとおして若い世代の人材育成に励んでいる。モノづくりに対してはもちろんであるが、何事にも真面目にとり組む姿勢は半端ではない。そんな谷口氏に「技術者人生の法則」について話をうかがう。

